

進路希望と学校の助言

具体的な進路を考え始めました。中には、現状の学力では希望する高校への合格が難しいという人もあります。受検自体はあくまでも本人と保護者の判断です。学校が決めるわけではありません。したがって、どんな高校でも受検したいと思えば可能です。しかし、受検すれば必ず合格が勝ちとれるというわけではなく、全受検者の中から不合格者がでてしまいます。受検できることと、合格できることとは違うのです。

学校の助言は、合格できそうか、そうでないかという点に絞られます。人によっては不合格濃厚であっても受検したいということもあるでしょう。それを止める権利は学校にはありません。なぜ、このようなことを述べるのかというと、中には、「学校が受検を許可した」と受け取る人がいるためです。「学校が受検を許可したのだから、合格するのだろう」と楽観的に考える人も中にはあります。学校は受検に対して許可も不許可もしません。ただ、可能性の話をするだけなのです。（ただし、推薦は別です。推薦受検は学校が許可、不許可を判断します。推薦するのは学校ですから。）とはいえ、本人も保護者も材料なしに判断するのは難しいと思うので、個別に必要な判断材料を提示しています。

では、どのように学校は合格可能性について助言するのかというと、これまでのデータと経験を駆使しています。合格可能性は、受検日の出来不出来、倍率に左右されます。正確な予測は不可能です。しかし、附中模試等の結果によって、ある程度の予測は可能です。過去の合否の結果をもとに、個々の生徒の得点力から可能性を判断するのです。当然、当日の緊張や体調不良、学力の向上等を考慮した上で、個々の得点幅を予測します。その予測を、個別指導や懇談で伝えています。時々、「今度の模試で何点取れば合格できるのか？」といったことを聞かれることがあります。ここまでの説明でわかると思いますが、残念ながら、そのようなはっきりしたボーダーラインは引けないのです。お伝えできるのは、あくまでも可能性です。極端な話をすると、いくら附中模試で高得点を連発していても、本番で失敗すれば残念な結果になることもあるのです。

学校は、残念な結果を極力少なくしたいと考えますので、合格可能性が薄い場合には、そのことをはっきりと伝えます。その上で各自が判断する必要があると考えています。担任から厳しい話を聞いてショックを受ける姿も時々見られます。そのような姿を見るのは、担任もつらいのです。しかし、なにもわからず希望だけを抱いて受検に向かう危険性を学校は十分理解しています。そのために、厳しいことも話すのです。それでも、学校が話すのは助言です。判断ではないのです。あらゆる場合を想定して、しっかりと各自で判断してください。



中間テストの様子。この真剣さを持続し、是非希望高校合格へとつなげてほしいです。

推薦受検希望申込書・県外高校受検届け〆切迫る

進路説明会でも説明しましたが、推薦受検希望申込書および県外受検届けの〆切が迫っています。**〆切は11月30日(金)**です。特に推薦受検希望に関しては、事務手続き上、また推薦という特性上、この日以降の受付ができないので、余裕を持って提出をお願いします。

推薦受検希望は、記述内容が多く、自分のことを深く考える必要があります。推薦受検を考えている人は、ギリギリになって書き始めても間に合わないのです、すぐにでも書き始めてください。書いた上で提出するかどうかを決めても構わないのです。

県外高校は鳥取県とは違う受検制度で実施しています。特に公立高校は、多くの書類を準備して、学校が主体となって願書提出を行う場合が多いです。附属中学校としましても、早めに準備を進めたいと考えています。私立高校は、準備する書類自体は公立に比べて少ないですが、受検制度が複雑な高校が多いです。

口頭では、ある程度伺っていますが、正式に受け付けるために、届けを〆切までに提出してください。